

現場が育ててる若手技術者

今月14日、宮城県南三陸町に新しい総合病院となる「南三陸病院・総合ケアセンター南三陸」（南三陸病院が開院した。この工事を施工した銭高組東北支店の土田直行作業所長は「現場は職場であると同時に技術者としての学習の場でもある。若手の育成に何をすべきか、何をすべきか、何をすべきか」と話している。そこで、副所長を務めた足立浩一氏と、工事係として尽力した小松弘幸氏に、南三陸病院での仕事で自分たちに何を残したかを聞いてみた。（東北支社・嶋志田隆之）

スコープ 人材育成

南三陸病院は、東日本大震災後、同町で第1号の建築工事となった。RC・一部S造3階建て延べ床面積約1万2000平方メートルの病院を14年7月から15年10月までの工期で施工した。土田作業所長以下、足立、小松両氏も、13年4月にオープンした東北大学の東北メディカル・メガバンクの現場から南三陸病院に職場を移したチームの一員。震災直後からずっと、労務や資材が不足する中での施工が続いていた。



足立氏



小松氏

「南三陸病院では初めて副所長を任せられました。施工図作成などは統括副所長が担当しており、私はそれを基に、実際の施工サイトで全体の管理運営を行う立場です」。足立氏はこの現場で、施工管理の傍ら、原価管理を徹底して学ぶよう、土田作業所長に指示されたという。

「慢性的に人手不足の東北ですから、工区の分け方と工事の進行に合わせた細

きました」と目を輝かせる。それでも作業所長からは「失敗と無駄があった時、それがなぜ起きたか自分なりに考え日誌を残せ」と指導された。これは南三陸病院作業所の全職員が命じられたことだった。

「反省はもちろんです。よく考えて今後には生かすための糧にせよ、というポジティブな指示でした。これは自分自身に大変実になる経験でした」（足立氏）。「仕事を任せられた責任を感じるだけでなく、信頼されたことと自覚することが大事です。協力会社とのつながりについても、前向きな姿勢から人望を得るのだ、と思います」（小松氏）。

11月下旬の落成の日、来客を案内しながら病院玄関の受付後方で待機していた足立氏と小松氏は「ここから海が見えるんだな」「ああ、本当ですね」と言葉を交わっていた。それは工事中にも目に入っていたと思われるが、きつと初めて、落ち着いた気分であつた景色だったに違いない。

「若手技術者が夢中で打ち込んだ現場は、一生の記憶にとどまる学舎（まなびや）だった。その病院はこれから、南三陸町の新しい街づくりをリードしていく。」

原価管理で円滑な施工 足立氏

やかな発注が重要。これをうまく回転させるために原価が大事だし、円滑な施工で経済的な無駄も無くせる」。



南三陸病院外観



南三陸病院夜景

小松氏は、4人のチームで外壁や外構の施工管理を担当し、品質管理をやり遂げた。同病院は外断熱湿式工法を採用しており、機能性や収まり、風合いの厳しい検査をパスした。「スペインが長く広い面積の仕上げ工事でした。高い品質を一貫して確保するために、設計の要求をよく理解し、手戻り作業の無いよう確認していくのが主な仕事でした」と作業を振り返り、「納得のいく引き渡しので

高品質を一貫して確保 小松氏

足立氏は入社15年、当初は大工になりたいと考えて建築の道に入った。これまでマンションや医療センターなどの現場に配属されてきたが、今回は今まで以上の重責を担った。それはまた一つ自信につながり、「小さな現場でもよいから、所長として全体を任

るようになりたい」と胸を張る。出身地の福岡県でキャナルシティ博多建設工事のダイナミックさに憧れ、施工主体だった銭高組に入社して10年目の小松氏も、「大型商業施設や美術館のようににぎわいを呼び込む建築に携わりたい」と次の目標を胸に抱く。